

京都日記

芥川龍之介

青空文庫

光悦寺

くわうえつじ

光悦寺へ行つたら、本堂の横手の松の中に小さな家が二軒立
つてゐる。それがいづれも妙に納をさまつてゐる所を見ると、物置きな
んその類ではないらしい。らしい所どころか、その一軒には大倉喜八
郎らう氏の書いた額がくさへも懸かかつてゐる。そこで案内をしてくれた小
林雨郊やしうかう君をつかまへて、「これは何なんです」と尋ねたら、「光
悦えつくわい 会かいで建てた茶席です」と云ふ答へがあつた。

自分は急に、光悦会がくだらなくなつた。

「あの連中は光悦に御出入おでいりを申しつけた気であるやうぢやありま

せんか。」

小林君は自分の毒口どくぐちを聞いて、にやにや笑ひ出した。

「これが出来たので鷹ヶ峯たかみねと驚ヶ峯わしみねとが續いてゐる所が見えなくなりました。茶席など造るより、あの辺の雑木ざんきでも払へばよろしいにな。」

小林君が洋傘かうもりで指さした方を見ると、成程なるほどもぢやもぢや生え繁つた初夏しよかの雑木ざんきの梢こずえが鷹ヶ峯の左の裾を、鬱陶うつたうしく隠して

ゐる。あれがなくなつたら、山ばかりでなく、向うに光つてゐるおほたけおほたけやぶもよく見えるやうになるだらう。第一その方が茶席を造るよりは、手数てすうがかからないのに違ひない。

それから二人ふたりで庫裡くりへ行つて、住職の坊はうもつさんに宝物を見せて

貰つた。その中に一つ、銀の桔梗きぎやうと金の薄すすきとが入り乱れた上に美しい手蹟しゆせきで歌を書いた、八寸四方位くらみの小さな軸ちくがある。これは薄すすきの葉の垂れた工合ぐあひが、殊とに出来が面白い。小林君は専門家だけに、それを床柱とこばしらにぶら下げて貰つて、「よろしいな。銀もよう焼けてゐる」とか何なんとか云つてゐる。自分は敷島しきしまを啣くはへて、まだ仏頂面ぶつちやうづらをしてゐたが、やはりこの絵を見てゐると、落着おちきのある、朗ほがらかいな好いい心もちになつて来た。

が、暫しばらくすると住職の坊さんが、小林君の方を向いて、こんな事を云つた。

「もう少しすると、又一つ茶席が建ちます。」

小林君もこれには聊いささか驚いたらしい。

「又光悦会ですか。」

「いいえ、今度は個人でございます。」

自分は忌々しいのを通り越して、へんな心もちになつた。一

体光悦くわうえつをどう思つてゐるのだから、光悦寺をどう思つてゐるの

だから、もう一つ序ついでに鷹ヶ峯をどう思つてゐるのだから、かうなると、

到底たうてい自分には分らない。そんなに茶席が建てたければ、茶屋四

郎次郎らうじらうの邸やしき跡あとや何かの麦畑でも、もつと買占めて、むやみ

に囲ひを並べたらよからう。さうしてその茶席のきの軒がくへ額がくでも提ちやう

灯ちんでもべた一面に懸けるが好よい。さうすれば自分も始めから、

わざわざ光悦寺などへやつて来はしない。さうとも。誰が来るも

のか。

後あとで外へ出たら、小林君が「好いい時に来ました。この上茶席が建つたらどうもなりません。」と云つた。さう思つて見れば確たしかに好い時に来たのである。が、一つの茶席もない、更に好い時に来なかつたのは、返す返すも遺憾みかんに違ひない。——自分は依然いぜんとして仏頂面ぶつちやうづらをしながら、小林君と一しよに竹藪うしろの後に立つてゐる寂しい光悦寺の門を出た。

竹

或雨あまあがりの晩に車に乗つて、京都の町を通つたら、暫しばらくして車夫しやふが、どこへつけますとか、どこへつけやはりますとか、何と

か云つた。どこへつけると、宿へつけるのにきまつてゐるから、宿だよ、宿だよと桐油とうゆの後から、二度ばかり声をかけた。車夫はその御宿おやどがわかりませんと云つて、往來わうらいのまん中に立ち止まつた儘、動かない。さう云はれて見ると、自分も急に当惑たうわくした。宿の名前は知つてゐるが、宿の町所ちやうどころは覚えてゐない。しかもその名前なるものが、甚平凡きはなはだを極めてゐるのだから、それだけでは、いくら賢明な車夫にしても到底たうてい底満足とうゆに歸られなからう。

困つたなと思つてゐると、車夫が桐油とうゆを外はづしてこの辺ぢやおへんかと云ふ。提灯ちやうちんの明りで見ると、車の前には竹藪があつた。それが暗の中に万竿ばんかんの青せいをつらねて、重なり合つた葉が寒さうに濡ぬれて光つてゐる。自分は大人な所へ来たと思つたから、こん

な田舎ぢやないよ、横町よこちやうを二つばかり曲ると、四条の大橋しどう おほはし
 へ出る所なんだと説明した。すると車夫が呆れた顔をして、ここ
 も四条の近所ですがなと云つた。そこでへええ、さうかね、ぢや
 もう少し賑かな方へ行つて見てくれ、さうしたら分るだらうと、
 まあ一時を糊塗ことして置いた。所がその儘、車が動き出して、とつ
 つきの横丁を左へ曲つたと思ふと、突然歌舞練場かぶれんぢやうの前へ出てし
 まつたから奇体きたいである。それも丁度ちやうど都踊みやこをどりの時分だつたか
 ら、両側には祇園団子ぎをんだんごの赤い提灯が、行儀ぎやうぎよく火を入れて並
 である。自分は始めてさつきの竹藪が、建仁寺けんんにんじだつたのに気が
 ついた。が、あの暗を払つてゐる竹藪と、この陽気な色町いろまちとが、
 向ひ合つてゐると云ふ事は、どう考へても、嘘のやうな気がした。

その後、^{のち}宿へは無事に^{たど}辿りついたが、当時の狐につままれたやうな心もちは、今日^{けふ}でもはつきり覚えてゐる。……

それ以来自分が気をつけて見ると、京都界^{かいわい}隈にはどこへ行つても竹藪がある。どんな賑^{にぎやか}な町中^{まちなか}中でも、こればかりは決して油断が出来ない。一つ家並^{やなみ}を外れたと思ふと、すぐ竹藪が出現する。と思ふと、忽ち又町になる。殊に今云つた建仁寺^{けんんにんじ}の竹藪の如きは、その後^{のち}も祇園^{ぎをん}を通りぬける度に、必ず棒喝^{ぼうかつ}の如く自分の眼前へとび出して来たものである。……

が、慣れて見ると、不思議に京都の竹は、少しも剛健な気がしない。如何^{いか}にも町慣れた、やさしい竹だと云ふ気がする。根が吸ひ上げる水も、白粉^{おしろい}の勻^ひがしてゐさうだと云ふ気がする。も

う一つ形容すると、始めから琳派りんぱの画工のぼの筆のぼに上る為のぼに、生えて
 来た竹だと云ふ気がする。これなら町中まちなかへ生えてゐても、勿論
 少しも差支さしつかへはない。何なら祇園ぎをんのまん中なにでも、光悦くわうえつの
 蒔絵まさゑにあるやうな太いやつが二三本、玉立ぎよくりつしてゐてくれたら、
 猶なほさら更さら以て結構だと思ふ。

裸根はだかねも春雨はるさめ竹だけの青さかな

大阪へ行つて、龍村たつむらさんに何か書けと云はれた時、自分は京
 都の竹を思ひ出して、こんな句を書いた。それ程竹の多い京都の
 竹は、京都らしく出来上つてゐるのである。

舞妓まひこ

かみきやまち
上木屋町のお茶屋で、酒を飲んでゐたら、そこにゐた芸者が一

人、むやみにはしやぎ廻つた。それが自分には、どうも躁狂さうきやう

の下地したぢらしい気がした。少し気味が悪くなつたから、その方の相はう

手を小林君こばやしに一任して、隣にゐた舞妓まひこの方を向くと、これはお

となしく、椿餅つばきもちを食べてゐる。生際はえぎはの白粉おしろいが薄くなつて、

健康らしい皮膚が、黒く顔を出してゐる丈だけでも、こつちの方が遙はるか

に頼もしい気がする。子供らしくつて可愛かはいかつたから、体操を知

つてゐるかいと訊きいて見た。すると、体操は忘れたが、縄飛びな

ら覚えてゐると云ふ答へがあつた。ぢややつてお見せと云ひたか

つたが、三味線しやみせんの音ねがし出したから見合せた。尤もつともさう云つて

も、恐らくやりはしなかつたらう。

この三味線しやみせんに合せて、小林君が天津絵おほつゑのかへ唄を歌つた。何でも文句もんくは半切はんせつに書いたのが内にしまつてあつて、それを見ながらでない、理想的には歌へないのださうである。時々あぶなくなる、そこにゐた二三人の芸者が加勢かぜをした。更にその芸者があぶなくなると、おまつさんなる老妓らうぎが加勢をした。その色々の声が、天津絵を補綴ほてつして行く工合ぐあひは、丁度ちやうど張り交まぜの屏風びやうぶでも見る時と、同じやうな心もちだつた。自分は可笑をかしくなつたから、途中でははと笑ひ出した。すると小林君もそれに釣かりこまれて、とうとう自分で天津絵を笑殺せうさつしてしまつた。後はおまつさんが独りでしまひまで歌つた。

それから小林君が、舞妓まひこに踊をどりを所望した。おまつさんは、座敷が狭いから、唐紙からかみを明あけて、次の間まで踊ると好いと云ふ。そこで椿餅つばきもちを食べてゐた舞妓が、素直すなほに次の間へ行つて、京の四季を踊つた。遺憾ながらかう云ふ踊になると、自分にはうまいのだかまづいのだかわからない。が、花簪はなかんざしが傾いたり、だらりの帯が動いたり、舞扇まひあふぎが光つたりして、甚綺麗はなはだきれいだつたから、鴨口オスかもを突つつきながら、面白おもしろがて眺めてゐた。

しかし実を云ふと、面白おもしろがつて見てゐたのは、単に綺麗だつたからばかりではない。舞妓まひこは風を引いてゐたと見えて、下を向くやうな所へ来ると、必ず恰好かつかうの好い鼻の奥で、春泥しゅんでいを踏むやうな音がかすかにした。それがひねつこびた教坊けうぼうの子供らし

なくつて、如何にも自然な好い心もちがした。自分は酔つて
 て、妙に嬉しかつたから、踊がすむと、その舞妓に羊羹だの椿
 餅だのをとつてやつた。もし舞妓にきまりの悪い思ひをさせる惧
 がなかつたなら、お前は丁度五度鼻涙を啜つたぜと、云つて
 やりたかつた位である。

間もなく躁狂の芸者が帰つたので、座敷は急に静になつた。
 ガラス窓硝子の外を覗いて見ると、広告の電燈の光が、川の水に映つて
 る。空は曇つてゐるので、東山もどこにあるのだから、判然
 しない。自分は反動的に気がふさぎ出したから、小林君に又大津
 絵でも唄ひませんか、云つた。小林君は脇息によりかかりな
 がら、子供のやうに笑つて、いやいやをした。やはり大分酔がま

はつてゐたのだらう。舞妓は椿餅にも飽きたと見えて、独りで折をりづるこしら鶴を拵へてゐる。おまつさんと外ほかの芸者とは、小さな声で、誰かの噂か何かしてゐる。——自分は東京を出て以来、この派手はでなお茶屋の中で、始めて旅りよしう愁らしい、寂しい感情を味あぢはつた。

(大正七年六月)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

京都日記

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>